京都教育大学 教育資料館 まなびの森ミュージアム

今月の逸品

京都市伏見区深草藤森町1
☎：075-644-8175
✉：manabi@kyokyo-u.ac.jp

NO.55 2021.10～2021.11

MUSEUM OF EDUCATION

「一個（T）」

1990
W380/H250/D50
桑田道夫（1916-2002） 作

桑田道夫は 1971 年から 1980 年まで京都教育大学の西洋画の教授を務めた。

本作は、1990 年の個展に出品された作品（※１）である。木枠の中にグレーに着色された矩形の石膏の厚板が配置され、その中央少し上方に正方形の窓があけられている。窓の周囲は荒いタッチで赤に塗られ、その奥には褐色の陶製のタイルが嵌め込まれている。自身を「画家というより作家といった方が適切かと思う」と述べているように、彼の作品は所謂絵画のイメージに収まるものではない。現代美術の作家として位置付けられる所以でもある。

作品を前にすると、まず視線は窓とその奥のタイルに誘導される。照明の影になって少々中が見えにくいのでなおさらである。しかし凹部から目を離し、作品をその構造の中で捉えていくと、作品そのものの存在がにわかに立ち上がってくるように感じられる。彼は、自身の作品について何に属するのかと問われ「画面に対するひとつの、自分なりの意志を持ち続けてきている」と述べているが、極めて物質的でありながら、人と絵画との間にある（ある意味観念的な）構造に対する彼の確信をそこに見るようで興味深い。

桑田のアトリエは、身の回りにある人工物の収集品で溢れていたといわれる。本作に使われたタイルは、その中にあった自邸の建材として使われた残りものということらしい。ドンゴロスの布目模様が施され飴釉の濃淡が美しいそのタイルは、知る人ぞ知る京都の「泰山タイル」の製品である。一つ一つ職人が型から起こして作った手作りの建築装飾タイルで、均質な工業製品にはないレトロな美しさを宿している。

2002 年の没後、2009 年には教え子たち（＋α プロジェクト）が中心になって京都市美術館別館で回顧展が開催された。さらに桑田が京都大学建築学科（※２）の学生と実験的な試みとして建てたアトリエが近年ギャラリーとして改装され、今年(2021 年）の５月には＋α プロジェクトのメンバーによるグループ展が開かれた。開放的な空間には、桑田が彼らに残したさまざまなものが、その場の空気として確かに存在していた。

参考文献：「桑田道夫 講演」／＋α プロジェクト(発行元)／2001

※１：元本学講師小林良子氏から教育資料館に寄贈されたものである。

※２：1960-1980 京都大学工学部建築学科の非常勤講師を務めた。

執筆者：丹下裕史（美術科 教授）

※附属図書館で展示しています。